

Editorial

特集「リサーチ・スルー・デザインの新たな地平」に寄せて

『ソーシャルクリエイティブ研究』編集長 岩寄 博論

『ソーシャルクリエイティブ研究』第3号では、「リサーチ・スルー・デザインの新たな地平」という特集テーマを設けた。リサーチ・スルー・デザイン (Research through Design: RtD) は、1993年に、当時ロイヤル・カレッジ・オブ・アートの学長を務めていたクリストファー・フレイリング (Christopher Frayling) によって提唱された概念である。フレイリングは、デザインやアートの研究を次の3つに分類した。デザインに用いる技術や材料を対象とする「Research for Design」、理論や批評を通じてデザインそのものを考察する「Research into Design」、そして、実践や制作のプロセスを通じて知識を生成する「Research through Design」である。

RtD が提唱された背景には、仮説検証や再現性を重視する実証主義的な研究アプローチに対し、デザインやアートにおける実践的研究の役割を明確にする意図があった。このアプローチはその後広く普及し、今日では多くの研究・教育機関で取り入れられている。武蔵野美術大学ソーシャルクリエイティブ研究所は、ビジョンとプロトタイプを通じた社会課題の解決を目的としており、RtD との親和性が極めて高いことから、本特集のテーマに選定した。

本特集には、二編の論文と一編の書評を掲載した。論文はいずれも武蔵野美術大学造形構想研究科およびソーシャルクリエイティブ研究所の研究成果をまとめたものである。また書評では、国内における RtD の貴重な研究書を取り上げており、いずれも本特集の趣旨に深く合致する内容となっている。

『リサーチスルーデザインを用いた環境音への注意を喚起するデザインが認識の枠組みを変容させていくプロセスの研究』は、音に耳を澄ませることで畏敬の念を育む「注意を喚起するデザイン」のあり方を、実践を通じて探索した研究である。3つの実践から得られたデータを M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）の手法を用いて理論化しており、多様な器具の制作を通じて「音と畏敬」の関係を探求する姿勢は、まさに RtD のアプローチを体現するものといえる。

『アートワークショップによる創造性教育の試み—高校生を対象とした実践報告』は、同大学でのワークショップを通じた創造性教育の実践報告である。本研究は、実践の過程で問いと手法が並行的に生成されるという RtD の重要な論点に立脚している。「ワークショップの実践が、参加者の観察力・批判力・構想力といった創造的思考能力にいかなる変化をもたらすのか」という問いに対し、実践を介した緻密な探索がなされている。

書評『方法論としてのリサーチ・スルー・デザインの現在地と展望』で取り上げた書籍、三好賢聖『動きそのもののデザイン—リサーチ・スルー・デザインによる運動共感の探究』（ビー・エヌ・エヌ、2022）は、「動き」に着目し、人間と物の「運動共感」によるデザイン手法を体系化した RtD の研究書である。本書評は、同書における論点を鮮明に描き出し、フレイリングが提唱した精神を現代に甦らせるものとして高く評価している。

これら三つの論考は、特集テーマに対してそれぞれ独自の視座を提供するものである。自然科学やそれに準ずる社会科学の多くが実証主義に依拠するなか、デザインやアート固有の研究方法論は、RtD の提唱から 30 年が経過した今なお進化の途上にある。本書評で扱った文献をはじめ、日本における RtD の進展は著しい。本特集が、この領域の可能性をさらに広げる一助となれば幸いである。